

厚生労働省科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））
分担研究報告書

保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを探る

分担研究者 勝浦眞仁 桜花学園大学 保育学部 准教授
研究代表者 上田敏丈 名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 教授

研究要旨

保護者支援における保育士の困難感を文献研究から理論的に探究する基礎的研究として、保育士と保護者との関係性の変容という観点から、保育士の困難感のフェーズを明らかにしていくことを目指した。その結果、関係構築期には、「保護者および保育士の特徴・性格に起因する躊躇」および「保育士が保護者に子どもの姿を伝達することに伴う難しさ」、関係葛藤期には、「保育および子どもに関する相互理解がすれ違ってしまうことによる困難感」および「子どもの最善の利益と保護者の意思尊重との板挟みによる困難感」、関係困難期には、「保護者からの信頼感が失われてしまった状況」という3つのフェーズにおける保育士の困難感の仮説モデルを提唱した。各フェーズにおいて活きる保育士の専門性として、「コミュニケーション」「相互理解」と「子どもの最善の利益」「ソーシャルワーク」をそれぞれ挙げたが、十分に発揮できていない状況がありうることを述べた。また、保護者との関係性によらないものの、「保育システム」および「社会背景」という保育士の困難感を生じさせる要因についても指摘した。

A.研究目的

保育士と保護者との関係性の変容という観点から、保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを明らかにし、その変容モデルを提示することを目的とした。

これにより、タイミングのよい保育士のサポートを提供することが可能となり、保育士の抱える困難感が多少なりとも和らげられることにつながるという意義があった。

B.研究方法

保護者支援における保育士の困難感を文献研究から探究した。

先行研究において提示されていた、保護

者支援における保育士の困難感に関する項目や記述を合計119項目抽出した。それらを「関係構築期」、「関係葛藤期」、「関係困難期」の3つのフェーズに分類した。

C.研究結果

「関係構築期」では、「保護者および保育士の特徴・性格に起因する躊躇」および「保育士が保護者に子どもの姿を伝達することに伴う難しさ」を述べた。

「関係葛藤期」では、「保育および子どもに関する相互理解がすれ違ってしまうことによる困難感」および「子どもの最善の利益と保護者の意思尊重との板挟みによる困難

感」を指摘した。

「関係困難期」では、「保護者からの信頼感が失われてしまった状況」が生じることを述べた。

D.考察

「関係困難期」に至るまでには、それまでの保育士と保護者とのかかわりの積み重ねによるところがあると考えられることから、現時点においては、各フェーズは固定化されたものとしてではなく、連続するものとして描くこととした。

実際、見出された困難感それぞれとの間で、関連性のある場合もあったことから、保育士と保護者との関係性が変容していく動態として、各フェーズにおける保育士の困難感を明らかにし、モデル化することができた。

また、各フェーズにおいて活きる保育士の専門性として、「コミュニケーション」、「相互理解」と「子どもの最善の利益」「ソーシャルワーク」をそれぞれ挙げたが、十分に発揮できていない状況がありうることを述べた。

E.結論

保育士が保護者との関係について感じている難しさについて詳細に検討することができたとともに、肯定的な変容としてではなく、より厳しい状況へと変容していくモデルを図1のように示すことができた。

このモデルをベースとすることで、フェーズ毎に生じると考えられる保護者支援における保育士の困難感に適したサポートを提供できることにつながっていくとともに、新たな保護者支援のあり方を検討していく

足掛かりとなった。

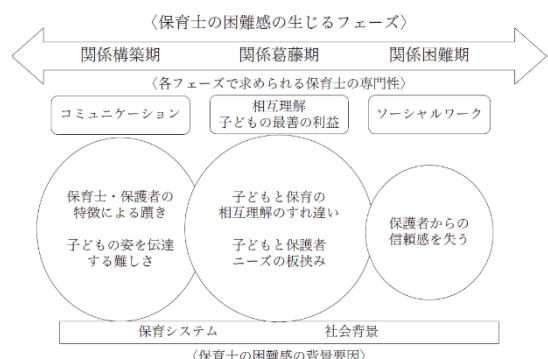


図1：保護者支援における各フェーズにおいて保育士の抱える困難感とその背景

付記

桜花学園大学保育学部紀要第24巻, 35-50